1Rp-6

家族のかかわりの一考察（7）
－“物”とのかかわりを通して思春期を考える－

中村洋子（お茶の水女大　研究生）

目的：この研究は日常生活の中における思春期の子どもの自己形成の過程を考える連続研究である。今回は思春期の子どもと“物”とのかかわりに着目し、思春期の子が物を通して要求していること，それにより変化する家族のかかわりを分析し 考究する。方法：思春期の子ども達への ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ・ 質問紙（T高校 1・2年生）により思春期の子が かかわる“物”の中から現代を象徴する物　1.自動販売機，ｺﾝﾋﾞﾆ 2.電話，携帯電話，ﾎﾟｹﾍﾞﾙ 3.ｳｫｰｸﾏﾝ，ｹﾞｰﾑｳｫｯﾁ，ﾀﾏｺﾞｯﾁ 等 を取り上げ分析する。また“コンビニ”をﾃｰﾏとした心理劇（1997~1998年 O大 女性と家族をめぐる人間関係を考える会）から 思春期の子どもと“物”と家族の関係状況をとらえ 分析考察する。結果・考察：1）人とかかわらず、自己の要求する“物”を得る状況は、人とのやりとり行為の減少になるが、子が直接“物”と出会い やり取りできる状況を形成する 2）個と個が直結できる“物”の出現は 人と人との活動を単純化し、家族と外の人との関係を区別することができる 3）物が人を支配する状況は、その状況に取り込まれることで満足感を得る。人とのかかわりは少なくなるが、物の持つ話題が人と人との媒介になって新たな関係に発展する。よって思春期の子にとって これらの“物”は人の干渉を抑え、人との関係を整理し、手軽に充足感を得る体験を持つ事で、自発的・主体的に思考することができ、家族との新たな関係発展につながることが明らかになった。